

日本作業療法士協会 海外研修助成制度
実績報告書

発表演題名 : Transitional characteristics of occupational experiences among working-age adults in Japan on becoming a caregiver for their parents.

学 会 名 : WFOT international congress (世界作業療法士連盟大会)

会 期 : 2022/8/28～2022/8/31

開 催 地 : PARIS CONVENTION CENTRE フランス・パリ

氏 名 : 鈴木 洋介

所 属 士 会 :

1. 発表演題の概要

Introduction:

In Japan, it is considered that working-age caregivers should be better supported to prevent social issues such as parental abuse. However, there is only a little research. The aim of study is to explore the lived experiences among working age adults of becoming a caregiver for their parents and to clarify the transitional characteristics.

Method:

12 participants from across Japan (between late 20s and late 50s) who had experience of taking care of parents were recruited. They signed informed consent beforehand. Participants were separated into two groups. Two 120 min focus groups employing the photo elicitation method were carried out in addition to an online personal interview. The topic was “the journey as a caregiver for parents”. Data was analysed using Interpretative phenomenological analysis by taking advantage of the Meleis’s transitional theory.

Findings:

Seven themes of transitional characteristics on becoming an informal caregiver for parents emerged.

1. Struggling after being faced with the disruption of needing to care for parents, 2. Struggling with building the meanings of various roles, 3. Being overwhelmed by negative attitudes in their community and society, 4. Being supported by sympathetic people in their community and society, 5. Going back and forth between the transitional process, 6. Acquiring the skills necessary to fulfil their various roles, 7. Integrating each role into their daily lives.

2. 学会参加と発表の印象

コロナ、戦争、円安...と、多くの壁がたちはだかる中、海外研修助成制度の支援により、WFOT congress 2022 in Paris に参加することができた。目的の一つは、長年の夢であった

WFOT の場で、大学院修士課程の研究「Transitional characteristics of occupational experiences among working-age adults in Japan on becoming a caregiver for their parents」についてポスター発表を行うこと、もう一つは、3年ぶりとなる対面での国際学会で世界中の作業療法士と交流し、ネットワークをつくることであった。

ポスター発表においては、「Lightning talk」という3分間で概要を発表できる機会を得ることができた。発表の際に内容を短い時間で端的に伝えられるよう、原稿を事前に用意し、音読練習、ジェスチャー、聴衆全体に視線を向ける練習を行った。当日は、緊張感でいっぱいだったが、アメリカからやってきたという同じ発表者の女性が声をかけてくれ、「時差ボケが大変ですよ！」、「私も緊張していますよ！」等の世間話ができることで緊張がほぐれ、楽しんで発表することができた。質疑応答では、私が質問者の回答に行き詰まっていると、彼女が「具体例を紹介してみたら？」と助け舟を出してくれ、日本文化における規範や考え方について研究参加者の具体的な経験を紹介することができた。多くの発表者は私のように原稿を読むことなくメモを見る程度であり、ユーモアを挟みながら明るい雰囲気での発表を行っている姿に刺激を受けた。私自身、研究の未熟さや英語の不十分さ、自分の消極的な態度等、思い知らされることは多々あったが、達成感の方が大きかった。これまで、口頭発表は気が引けてしまい選択できずにいたが、これらの経験を踏まえ、今度はより長い口頭発表に挑戦してみたいと思う。WFOTでの発表は、次なる目標と自己研鑽へのモチベーションとなる良い機会であった。

今回のWFOT学会全体の特徴に関しては、ハイブリッド開催であったことが挙げられる。口頭発表は事前録画での参加が可能であり、ポスター発表は、紙ポスター希望者以外、ウェブ上でポスターを閲覧し、Eメールで質疑応答する形式であった。対面での参加が難しい参加者であってもオンラインで参加ができた一方、やはり事前録画された口頭発表を会場で見ただけで、オンタイムでの質疑応答が行われない状況は寂しかった。また、ポスター前で気兼ねなくディスカッションしたり、ネットワークを作ったりすることを期待していたが、数少ない紙ポスター持参者以外は、それをできなかった点が残念であった。

演題における特徴としては、「Occupational Justice/human rights/equity/social inclusion」をテーマにした発表が多かったことが挙げられる。その中で、ドイツ出身の Jens が行ったトランスジェンダーの人々に焦点を当てた質的研究は印象的であった。性別移行（gender transition）の過程で経験された作業的不公正の語りをナラティブ分析し、その過程の中で transformative capacity の備わった様々な作業（カミングアウト等）を明らかにした研究であった。作業療法士になった頃は、対象となるのは病気や障害のある人々のみだと思っていた。しかし、このように、国際学会に参加してみることで、様々な国の作業療法士が、多様な文化や背景の中で引き起こされる複雑な社会問題を作業的不公正の視点から捉え、そのような状況にある人々への支援や社会変革を模索しながら行っていることは励みとなり、このような活動もまた作業療法の対象になり得るということを改めて認識することが出来た。

対面で参加したからこそ得られたことについては、以前から所属していた国際的なグル

ープ「SexgenOTOS」のメンバーたちと対面で意見交換できたことが挙げられる。このグループは、ジェンダーやLGBTQ+コミュニティにおける社会問題を作業の視点で検討している国際的な団体であり、2019年の夏に設立された後、コロナの影響によりオンラインでしかミーティングや勉強会を行えていなかった。しかし、対面での学会参加によって、コーヒークレイクやコンGRESパーティ等、交流できる機会が多く、メンバーの一人とは、お互いの国の状況について深いディスカッションをすることができ、今後の国際学会にて何か共同で研究できないかまで検討することができた。また、オランダ留学中にお世話になった教員と近況報告をしたり、論文やSNS等で名前の知られている臨床家や研究者と実際に会ったりすることができた。こういったこともまた対面参加だからこそ得られたことであり、今回の目的を達成することができたと思う。

このようにしてWFOT学会参加への挑戦を振り返ってみると、海外研修助成制度の支援がなければ、前述したような発表における達成感や国際的なネットワーク形成といった報酬は得ることが出来なかったと改めて思う。今回の経験を活かし、今後も更に国際的な活動に挑戦していきたい。

3. 文献

1)総務省 就業構造基本調査（平成28年度）

<https://www.stat.go.jp/data/shugyou/2017/pdf/kgaiyou.pdf>（参照2019.11.25）

2)厚生労働省 国民生活基礎調査（平成22年度）

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/dl/gaikyou.pdf>（参照2019.11.25）

3)内閣府 規制改革推進会議 保育・雇用ワーキンググループ」第7回 介護休暇、休業に関するヒアリング 株式会社大和総研政策調査部 2019.1

<https://www8.cao.go.jp/kiseikaikaku/suishin/meeting/wg/hoiku/20190109/190109hoikukoyo01.pdf>
（参照2019.11.25）

4)World Federation of Occupational Therapist (WFOT)

<https://wfot.org/about-occupational-therapy>

5)永井貴士,石井良和,工藤咲子,他: 家族介護者の健康状態の検討～人間作業モデルの意志に焦点を当てて～.作業行動研究,21:78-84,2017.

6)山根信吾,花岡秀明,清水一: 在宅脳血管障害患者の介護者における生活上の役割と介護感との関係.OT ジャーナル,45:1379-1386,2011.

7)北谷渉,新本薫,奥村美里,他: 発動性欠如、易興奮性など多様な高次脳機能障害を呈した症例の妻との二人暮らしを目指して.石川県作業療法学術雑誌,22:55-56,2014.

8)村上正和,福田真由,牧野美里,他: 家族介護者の介護負担感との関連因子についての文献的考察.作業療法,36:386-396,2017.

9)加藤真夕美,三浦明子: 「介護に対する思い」を多面的に評価することの意義.愛知医療学院短期大学紀要,9:29-37,2018.

- 10)西井正樹,出田めぐみ,祐野修,他：作業療法における家族介護負担感軽減への支援.総合福祉科学研究,3:155-163.2012.
- 11)Suzuki.Y, Bontje P: A literature review regarding Occupational Therapy for caregiver family members' occupational well-being. 2nd COTEC-ENOTHE CONGRESS, 2021.
- 12)Meleis AI, Sawyer LM, Im E-O, et al.Experiencing transitions: an emerging middle-range theory. ANS Adv Nurs Sci 23: 12–28, 2000.
- 13)アフアフ・イブラヒム・メレイス,片田範子（監訳）:移行理論と看護:学研メディカル秀潤社,東京,2019.
- 14)日本ケアラー連盟.<https://carersjapan.jimdofree.com/>（参照 2021.12.31）.
- 15)Stalmeijer S, Mcnaughton N, Van Mook W: Using focus groups in medical education research. AMEE Guide No.91, Medical teacher 36: 1-17, 2014.
- 16)ウヴェ・フリック:小田博志（監訳）,山本則子,春日常,他,新版「質的研究入門」〈人間の科学〉のための方法論:春秋社,東京都,2011.
- 17)Bates EA, McCann JJ, Kaye LK et al: “Beyond words”: a researcher’s guide to using photo. elicitation in psychology. Qualitative Research in Psychology 14: 459-481, 2017.
- 18)Holloway I, Wheeler S: Qualitative research in nursing and healthcare, 3rd edn, John Wiley and Sons, Chichester, 2015.
- 19)Harper D: Taking about pictures: a case for photo elicitation, Visual Studies vol. 17, no.1, 13-26,2002.
- 20)Epstein I, Stevens, B, McKeever P et al.: ‘Photo elicitation interview (PEI): using photos to elicit children’s perspectives’, International Journal of Qualitative Methods, vol. 5, no. 3, 1–11, 2006.
- 21)Rettie H, Emiliussen J: Practical impressions of interpretative phenomenological analysis. from the novice’s standpoint. Nurse Researcher 26: 46-49, 2018.
- 22)伊賀光屋: 解釈的現象学的分析（IPA）の方法論. 新潟大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編 6:169-192,2014.
- 23)久保田賢一：質的研究の評価基準に関する一考察 パラダイム論からみた研究評価の視点. 日本教育工学雑誌 21：169, 1997.
- 24)Crider C, Calder CR, Bunting KL et al: An Integrative Review of Occupational Science and Theoretical Literature Exploring Transition. Journal of Occupational Science 22: 304-319, 2015.
- 25)Hengelaar AH, van Hartingsveldt m, Wittenberg Y, et al.: Exploring the collaboration between formal and informal care from the professional perspective – a thematic synthesis. Health Soc Care Community 26: 474–485, 2018.
- 26)Jakobsen FA, Vik K, Ytterhus B: Adult children’s experiences of family occupations. following ageing parents’ function decline. Journal of Occupational Science 28: 525-536, 2021.
- 27)Rudeman DL: Transformative Scholarship: Possibilities and challenges for radical forms of participation. Japanese Journal of Occupational Science 13: 21-31,2019.

4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）

